

33	1	-	-	-
計	84	-	195	-

樹冠反率に対する枝條率の相関係数

こじい  $r_A = 0.52 \pm 0.054$

こなら  $r_A = 0.51 \pm 0.035$

胸高直径に対する枝條率の相関係数

こじい  $r_D = 0.35 \pm 0.065$       こなら  $r_D = 0.21 \pm 0.070$

以上の如く、今回の供試木によっては枝條率は胸高直径に対するものより樹冠反率に対して相関々疎大となる結果を得た。

## 宮崎地方シヒ・カシ天然林の伐業

シヒ・タスの伐出に就て (其 二)

宮崎大学農学部      三 善 正 市      緒 方 吉 算

本題其一(第59回日本林学会講演集)に宮崎地方シヒ・カシ天然林よりコジヒ・イクジヒ枝タスをパルム材として伐出利用せんとする目的の調査の功程に就て述べたがここでは其の求積に肉する二、三の検討を試みたい。

### I 立木材積

供試木たるシヒ・タスの立木材積は夫々胸高直径と樹高を測定して無本管林断調製の立木断材積表により算定し次に之を Hubber 氏区分求積法によつて断材積を算出し両材積を比較してみた結果、区分求積による断材積に対する材積表による断材積の比は 101.8% となった。直径階別には 10~14cm では 116~117% となったが 16cm 以上は 95~105% の範囲にあつて其差大ならず、立木材積の算定には両材積表を適用して差支なきものと認め、尙供試木はシヒ類 125 本タス 8 本胸高直径範囲 10~42 cm、林令 37 年である。

### II 丸木材積

パルム用丸太材(7尺)は末口自來法により求積されているが供試木より得たる 498 本の

求積法	Hubber 氏法	末口(最小径)自來法	Smaliar 氏法	丸太につき求積した結果
断材積比	100	90.3	106.2	Hubber 氏法による

材積より約 10% の減少を示した。直径階別には 4~12 cm は 80% 以下であるが、13 cm 以上は 90% 以上で 25~30 cm で最も近似している。此の供試木の平均胸高直径は 21.6 cm、平均樹高 13.7 m でマツ類に比し樹幹稍矮である。丸太の断面の最大径と最小径の比(平均)は 94.5% となり更に丸太の元口、中央、末口各平均直径の比は次の如く幹脚部丸太最も差

直 径	巻 (498本)		幹脚部 (138本)	中央部 (229本)	梢頭部 (131本)
	末口 元口	82.9	78.3	87.2	86.5
比	90.0		85.7	93.0	89.3
	中央 元口				

大きく梢頭部丸太之に亘り中央部は幹形上その差少し更に Huber 氏及末口自來法により樹幹部別に材積を算定したるに幹脚部は其形上より直径比に対し其差減少してより梢頭部に於て差異最も大である。

材 積 比	末口自來法 Huber氏法	巻	幹脚部	中央部	梢頭部
		90.3	90.7	90.8	85.6

本題其一運材難の項に於てクロマツ丸太に比し縮材減少は生材比重及丸太形状因子の外にシビ・タヌ丸太材積が軽少に算定されて居る懸念あるを述べたのであるが広葉樹材は針葉樹材に比較し樹幹形が梢段であり断面形不整にして殊に利用部に大枝が寄生すれば元口と末口の差を著しく大となり更行自來法では誤差を生ずる虞があるので此の自來法に就ては更に各地区の資料を蒐集して後日之を検討を試みるつもりである。

#### Ⅲ 利用材積

Huber 氏区分自來法による幹材積に対する造材々積の比は平均 82.1% (供試木 133 本造材々積は Huber 氏自來法による) となり相当高率を示している。之は本地方のシビ・タヌが比較的枝高長く形整良好なるに因るものと推定される。尚枝版よりの造材々積は幹材のそれに比し僅かに 4% に懸るなかつた。

## 竹材の採木系統学的的研究 (予報)

九州大学農学部 井上由扶  
青木尊重

### 目 的

竹材生産を中間目的とする竹林の経済蓄積を探究し、その作業法を検討して採種的收穫規程を究明することを目的とする。

本研究に当り終始指導を賜つた侯本宮林局小幡繁昌部長、藤井計爾部長並びに調査に当り多大の援助を戴いた福岡、大分両県庁及び福岡、佐賀、大分、日田各営林署の関係各位に厚く謝意を表す。

### 研究開始の経緯

1. 竹林の作業法についで研究されたものは既に少く、現存には非々な作業法が存在し、